

一九八七年（昭和六二）十一月から、栄養管理科の職員らとともに、開放講座として月三回の糖尿病教室を開講し、自由参加での聴講をよびかけた。糖尿病にかかった患者は、多くのばあい、生涯にわたる治療と予防を続けていかなければならない。さまざまな合併症の危険もある。

講座では、その糖尿病とはどんな病気なのか、どんな症状が出るのか、どんな治療法があるのかといったことから、患者一人ひとりが抱える細かな疑問までをあきらかにしていった。また映画を上映したり、栄養のバランスに配慮したメニューでの食事を催すなど、住民のなじみやすいかたちで、自宅で実行できる食事療法や運動療法を紹介して、症状の改善とともに予防の促進につとめた。

内坂院長夫妻が赴任してまもないころ、非常勤で新生病院を支えていた医師のひとりに、日本聖公会中部教区の植松従爾主教の夫人である植松喜久江医師がいた。植松喜久江医師は五〇年（昭和二五）、以前からボランティアを行っていた縁で、聖公会の奉仕によって山梨県高根町に開設された清里聖路加診療所へ赴任し、診療所の経営に奮闘した医師だ。過疎状態の無医村に女医さんが来たと、住民は彼女を大歓迎した。

「救急で来てほしいと使いが来れば、真夜中だろうが、いつでも往診した。馬で迎えに来ればいい方。自分の出産が間近だというのに、歩いて往診に行くという常識では考えられない医療奉仕で、あんな人は二度と出ないだろう」

『清里の父 ポール・ラッシュ伝』のなかで、診療所の経理事務を担当していた職員は回顧している。

内坂院長から助けを求められると、喜久江医師は、当時居をかまえていた大阪から、月曜の晩に夜行列車で小布施をおとすれ、内科と小児科の診療を行い、金曜の夜にまた夜行で自宅へもどるという日程で新生病院に貢献した。その往来は七〇回におよぶという。この行動力は、喜久江医師自身の医療への熱意と、清里での経験からつちかわれたものだろうか。

三 信頼される病院に

地域が求める医療を

小布施の周辺には、長野市の長野赤十字病院や長野市民病院をはじめ、須坂市の県立須坂病院、中野市の北信総合病院、飯山市の飯山赤十字病院などの大規模な病院がある。

新生病院は小布施町民だけでなく、高山村や一部の須坂市・中野市住民にとっても基幹病院となるべき位置にあるが、規模のことなるこれらの病院と対等のはたらしきをすることはできない。施設規模や医療機器などの設備が充実したいくつもの病院に囲まれ、新生病院がこの土地で生きのこるには、地域のニーズを的確にとらえ、それに応えることが必要だ。まずは、患者が訴える多様な症状に対して、正確な診断と適切な治療を行うためにも、技術の幅を広げ、診療科目を充実させなければならない。そしてもうひとつ必要なのは、各分野での専門性を高め、病院としての特色を出すことだ。

内坂院長夫妻が、小児科と内科を専門としていることは、病院にとって幸いだった。住民が世話になる診療科といえば、まずはこの二科目である。「風邪をひいた」「おなかが痛い」「子どもが熱をだした」。そんな時に安心してたよることができる。

内科医である内坂由美子医師はまず、糖尿病への対策に取りくみはじめた。住民健康診断を行った結果、糖尿病の患者が非常に多かったためだ。

清里との縁はこればかりでなく、療養所時代には、アメリカ聖公会のポール・ラッシュ博士（一八九七—一九七九）からの紹介で、遠方から結核患者が小布施へ来ることもあった。ポール・ラッシュ博士は、みづから考案した「清里教育実験計画」にしたがって、清里に清泉寮をきずき、農業や教育、医療など、総合的な地域の開発にその生涯をささげた人物だ。戦後の絶望的な状況から日本がたちあがるためのモデルとなるべき事業であった。内坂院長夫妻が新生病院へ赴任した当初、事務長をつとめていた柴山善弘も、かつて結核をわずらい、博士の世話でここへ入所したひとりだった。

また、内坂院長夫妻の友人で精神科医である俵嘉壽子^{かすこ}医師は、院長から応援をたのまれると、新生病院の下見を一度もしないまま神戸から駆けつけ、運営に協力した。このほかにも多くの医師が、時間をやりくりしては、新生病院を支えた。病院ばかりでなく、こうした医師たちのはたらきは、地域住民の支えでもあった。

患者にやさしい医療技術

一九八七年（昭和六二）十二月、新生病院に、療養所時代以来の念願であった外科が開設された。一般外科と呼吸器外科を専門とする伊藤道雄医師が赴任したのである。大人数の老いた患者たちの診療に終始してしまう現状から早くぬけだすためにも、外科医の力が必要だった。

八九年（平成元）には、バン格拉デシユで長期にわたり医療奉仕活動を行っていた宮崎亮^{あきと}医師が着任し、外科医療を充実させるとともに、新しく泌尿器科と皮膚科を開設した。同時に妻の宮崎安子^{やすこ}医師も赴任し、小児科の層を厚くした。

伊藤医師は、生まれ故郷である山形県米沢市で地域医療に取りくむことも考えていた。しかし内坂院長の強い希望を受け、また子どもの暮らす環境として都会よりも自然の豊かな小布施がよいと判断し、新生

病院への赴任をきめたのだった。医療のありかたについての考えも、内坂院長と共感できるところが多かった。

新天地の小布施で、伊藤医師は、外科医としての世界観がかわるほどの衝撃を受けることになった。それは小布施駅前で「田中外科肛門科医院」をいとなむ田中茂男医師との出あいである。この出あいが、伊藤医師だけでなく、新生病院にも大きな影響をおよぼしたのだった。

田中医師は、凍結手術の草分けとして海外にも名をとどろかせている。従来、内痔核の手術法は、メスで患部を切りとる結紮^{けっさつ}切除術がもつとも一般的だったが、手術のやりかたは医師によってさまざまであり、治癒の経過に大きな差があったり、再発のおそれもある方法だった。伊藤医師自身も、痔の手術にはもっぱら結紮切除術をもちいていた。しかしこの問題点が、手術後の伊藤医師を「ほんとうにこれで治るのだろうか」という、達成感のうすいモヤモヤした気持ちにさせたという。

いっぽうの凍結手術は、結紮切除術にくらべて出血が少なく、短時間ですむ方法で、術後は痛みが軽く、肛門機能障害もなく、手術の痕跡はじつにきれいに治癒する。

さっそく、伊藤医師は田中医師の指導をおおき、助手をつとめながらその技術を体得した。やがて伊藤医師みずからも執刀するようになり、ともに数多くの凍結手術をこなしてきた。この技術は内痔核や脱肛だけでなく、皮膚の腫瘍や再発乳ガン、舌ガン、悪性黒色腫、合併症をもち切除手術のできない患者の直腸ガンなどに幅広く応用されるようになった。現在では全国の患者が、伊藤医師をたよっておとずれるまじになっていく。

九〇年代に入ると伊藤医師は、胆石の治療法として、新生病院で初めて腹腔鏡下胆嚢^{たんのう}摘出手術を導入した。腹部の四カ所に小さい穴をあけ、腹腔鏡と処置器具を挿入して、モニターをみながら摘出を行うものである。この方法は感覚がつかみにくく、高い技術と豊富な経験を必要とするが、伊藤医師は九一年（平

成三 夏からの一年間に二〇例以上を成功させた。

伊藤医師がこの二つの手術法を積極的に採用したのは、技術的にすぐれているだけでなく、「患者にやさしい医療を提供したい」という伊藤医師の考えに合致するためだった。いずれの方法も痛みや出血が少なく、早期の離床・退院が可能である。患者にとって、少しでも安全で、安心できる医療をめざす伊藤医師の情熱があつてこそ、他に先がけてこれらの手法を確立できたのだろう。また、これらの手術法は、技術的な困難がともなうため、その有効性を認められながらもなかなか普及しないというのが現状だが、伊藤医師自身の技術力が、それを克服したのだった。

現在伊藤医師は、副院長として内坂院長をサポートし、また院長の理念とスタッフの置かれた職場の現状とのあいだで、円滑な運営を支えている。

「院長はすばらしい行動力で、豊かなアイディアをつぎつぎに実現していく。しかし現場がそれに対応しきれないこともあるし、ちがった考えをもつ職員もいる。私の役割は、院内の緩和剤といったところで」と、おだやかな表情で伊藤副院長は言う。

診療科目の充実

内坂院長は、外科をはじめとして順次専門医を病院にまねき、診療科目を増設していった。農業を主産業とする地方の小さな町にあり、大規模とはいえない医療法人の新生病院は、各科のすぐれた医師の力を必要としながら、医師からはあまり好まれない性格を宿命的にもっている。それだけにここへ赴任している医師は、病院の精神に共感し、医療者としての良心と情熱をもっている。

病院の名誉院長である橋爪長三医師は、内坂院長夫妻の赴任直後から、ボランティアで整形外科を支えてきた。当時、県のリハビリ専門施設「長野県リハビリテーションセンター」につとめていた橋爪医師は、

はじめは二週に一度、完全週休二日制がしかれてからは週に一度、無報酬で診療や手術を手がけてきた。橋爪医師による手術のため、新生病院では設備のととのわなかつた手術室に、電気メスなどの器具をそろえた。

学生のころから、橋爪医師はハンセン病患者の力になりたいと考え、医学部を卒業したのちは、国立療養所に長年勤務した。一九七四年（昭和四九）より、県のリハビリセンターで所長・医務部長などをつとめ、多くの肢体不自由者の機能回復に取りくんできた。神経麻痺による手足の障害の機能再建が、橋爪名誉院長が力をそそぐ中心的なテーマである。国際学会でも数々の成果を発表している。

九五年（平成七）九月に県のリハビリセンターを退職すると、翌十月から橋爪医師は新生病院の常勤医となり、名誉院長の名を受けた。JCM Aに入会していた縁で橋爪医師を知った内坂院長らが、一〇年がかりでよびかけ、やっとまねくことができたのだった。

内坂院長は言う。「橋爪先生は定年をすぎても、すぐには県職を降りられませんでした。すばらしい技術をもち、知名度も高い先生を、県も離しがたかつたようです。後任にふさわしい医師も、なかなかみつからなかつたのでしょう」。

この年の初めには、第二手術室が完成している。スタート博士の退任後、新生病院では長いあいだ外科・整形外科をもうけておらず、従来の手術室はどちらかといえば、病院としての体裁をたもつという程度の設備にとどまっていた。以前からの手術室の不便さを改善し、広さや照明、器具の収納機能など細かなところまで、専門家や看護婦の意見も取りいれて設計した。第二手術室の建設は、新生病院における外科・整形外科の医療技術が充実したことをあらわす象徴的な事業といえるだろう。

「的確な診察とよい治療。それが患者への一番のサービスであり、医者として当然のつとめ」
そんな姿勢で、橋爪名誉院長は患者と向きあう。趣味に興じることもなく、睡眠時間を削ってでも医療



1994年に新設された歯科口腔外科の診察室。広い庭や礼拝堂までをみわたせる眺めの良い場所で、医師と話す患者も笑顔

にうちこんできた人一倍の誠実さが、すぐれた実績を生み出したのだろう。橋爪名誉院長の腕をたよる患者は、長野県の東信・南信地方や大学病院からもおとずれる。現在は週に七、八人というペースで、患者の手術をこなしている。

一九九四年（平成六）には、歯科口腔外科が開かれた。これにともない、中庭に面して大きな窓に囲まれたあかるい診察室が誕生した。担当の北村豊医師は、その設計にも参加した。

北村医師は、着任の二年前に、学会で内坂由美子医師と出あって新生病院を知り、内坂院長の四つの方針に共感を覚えていたという。

歯科口腔外科の開設は、長野県の北信地方では、長野赤十字病院について二番目だった。地域で数少ない診療科目であり、患者は広く北信一帯からやってくる。医師の紹介を受けてさらに遠方からおとずれる患者もある。北村医師は、患者とのやりとりだけでなく、患者を紹介した医師らとの連絡を密にし、三者の交流をだいにしている。また、軽くみられがちな入院患者の口腔清浄について、看護婦に指導したり、日曜日にも休まず回診を行う。患者とひとことでも多く言葉をかわし、顔をみる時間が大切だと、北村医師は言う。

いっぽう理学療法科では、八九年（平成元）から「行事リハビリ」を開始した。

それまでも病院では、集団リハビリとして歌やゲーム、体操などを、午後の一時間ほどを使って毎日行っていたが、日々のリハビリにより変化をつけ、患者の心にもはりをもたせたいというねがいから生まれ

たのが行事りハビリだ。病院の方針の中核にある「患者中心の医療」を実践するためのアイディアのひとつだった。

第一回目は、四月にお花見昼食会を行い、以降、子ども日の巨大鯉のぼり作りや節分の豆まき、桃の節句のひな祭りなど、時節にあわせた催しを毎月一回実施した。行事をとおして、患者たちは昔の思い出話をしながら共同作業を楽しみ、「来月はなにをやるの？」と職員に笑顔で声をかける。